

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsushin.cool.coocan.jp/> e-mail: shakaitsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八―二一九〇四 電話・FAX(03)3299-5367

郵便振替 〇〇一〇〇―九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

くもくじ

■巻頭言■

ホメロス『イリアス』とマルクス『資本論』

滝野 忠：2

二〇一八年への抱負

二〇二〇年前後の情勢（上）

伊勢 太郎：3

ゲバラ没50年、『資本論』刊行150年に訴える

稲村 守：5

―マルクス経済学を学びなおし、科学的社会主義を守り発展させよう―

マルクスの志、その追求の軌跡を追う（五）

スメタナの連作交響詩『わが祖国』

中澤 秀行：9

―「原始キリスト教の歴史について」②―

読者からのおたより

……………12

旬刊 社会通信

NO.1255

二〇一八年一月一日号

二〇一八年一月一日発行
(毎月一日・十五日二回発行)

ホメロス『イリアス』とマルクス『資本論』

二〇一八年への抱負

「通信」を紙誌からインターネットに切り替え一年、二〇一七年十一月で満四〇歳を迎えた。ぼくの年齢はヒックリ返せば二七歳だから、「通信」は三二歳からになる。当初は、とりあえず一年ぐらいがんばってみるかと考えていたのだが、時代はそれを許してくれそうもない。

無料公開後、インターネットホームページの閲覧者はふえ、見た人からは「マルクス、エンゲルスと日本のマルクスである向坂逸郎の思想を正しく伝えてくれるのは、『通信』だけになりましたね」とのお便りをいただくことも少なくない。「通信」の読者はヴェテラン労働者が多く、たくさんの問題意識をもつ。暖め続けてきた問題意識を一気に吐き出す、貴重で学問的意義ある論稿を次から次へと寄せて下さる。

編集者の苦しみ、悩みは論稿が集まらないことだが、今の私は集まりすぎて嬉しい悲鳴、ぜいたくな悩みである。各地に出向くことも少なくない。全国の仲間が労働組合、市民団体、地域で奮闘努力する。力をふりしぼったすばらしい報告に接することが多い。編集者には宝の山である。旅はまず地方紙を買い求める。そこには都市にはない慣習と矛盾とがあふれている。勉強会の会場では彼らが発行するニュース、報告、冊子等に興味がわく。目を通し、メモをとる。

それらを、すべて掲載したいのだが、誌面はせいぜい一二〜一四頁だから、わが記憶にとどめざるをえないことが多い。四〇年来の読者は「ぼくが楽しく目を通したのは、『読者からのおたより』だった。なのに、この一年間、ほとんど読者のおたよりありません。ふやしてよ」、「ぼくの便りを久しぶりに載せてもらった。友人から『みたよ、元気でやってるんだな、安心したよ』との連絡ももらった。『通信』の存在感はここですよ」との意見をいただくことが少なくない。

編集子自身の想いも同じだから、ズシンと胸に響く。ホームページをいつまで続けられるかはわからない。二〇一八年度は、何としても読者の声を誌面に反映していきたい。紙誌の時は、請求書を送る、送金のときに振替用紙に必ず一言二言書いてくださる読者がほとんどだった。そこから、読者の想い、悩みを知ることができたのだ。感想をメールや郵便はがき、FAX等で送ってくだされば楽しい。

二〇一八年は激動の年になりそうだ。世界は荒れている。「平和」なのは沖縄を除く「日本」だけに見えるが、今号と次号の「二〇二〇年前後の情勢」にあるように、激動期に入ることも予想される。矛盾の拡大に立ち向かうには、しっかりした思想を柔軟に実践に活かす思想性が大事である。わが思想戦線で心配なのは、しっかりした思想が揺れ動いていること。「マルクスを超えた」かの主張も散見される。これには、ローマ時代の格言を進呈するだけで十分である。

「(ホメロスほどの偉大な詩人について判断を述べる場合には) 控えめ、かつ用意周到でなければならぬ。というのは、よくあることだが、自分に理解できないと、その点を非難するなどということになってはいけぬからである。どっち

みち誤りを犯すのが避けられないとするならば、多くのことを否認するよりは、いつそのこと、すべてを容認する方がいい。」

(クインティリアヌス『弁論術教程』第十卷1:26)

去年は『資本論』一五〇年、そして今年はマルクス生誕二〇〇年、マルクスとエンゲルスの共同の著作『共産党宣言』出版一七〇年の年だ。『宣言』は唯物史観を駆使し、社会主義の必然性を明らかにした。今年は『宣言』が示す道を確信する年にしたい。

(滝野 忠)

二〇二〇年前後の情勢 (上)

激動する世界

世界は激動のまっただ中にある。トランプは「アメリカ第一」をスローガンに、世界中の経済、政治の分野で「戦争」政策をおしすすめる。国内にあっても官僚、環境主義者、白人と有色人種、貧乏人と金持ちとの「戦争」を激化させる。政府内でも「戦争」が起きている。トランプの支配はゴットファーザーのそれと似ている。逆らう者、気に入らぬ者を切り捨てる。ファミリーがのし歩く。

トランプは公約を乱発した。なに一つ実現されていない。TPPやNAFTA、オバマケア廃止は「実行されたではないか」との意見がある。切り捨てただけであり、新たな方策は見えていない。

トランプは世界に矛盾を拡散した。世界の政治家でトランプと仲のいいのは安倍首相とイスラエルのネタニヤフ首相だけ。EU、中国、ロシアの権力者は一線を画す。

「反独裁革命」、イスラム国で揺れた中東に、平穏が訪れるかのようだが、シリアと和平、イスラム国後の中東の情勢は米国とロシア、トルコ、シリア、クルド、イラン、サウジの抗争がモザイクのように入り乱れ流動的である。そこにトランプは爆弾を投げた。サウジアラビアですら「パレスチナ人の歴史的、永久的な権利に反する」と批判する。

この傾向は、EUも例外でない。EUとロシア、EUと英国の外交・安保問題。EU構成国の富める国と貧しい国、さらにはEU構成国内部の「独立」問題は種火としてあり続ける。

「中華民族の再興」を唱える習近平の中国の動向にも目を離せない。習氏は、皇帝であるかのようにトランプを歓待した。中国は一九八〇年代の改革開放から四〇年で、世界第二の富を生産する国となった。経済力は日本の約二・五倍、米国の三分の一にもなる。毎年六%前後で富が拡大するとすれば、十年後は今の倍になる。日本の約四・五倍にもなる。中国の人口は十三億人を超えるから、国富拡大には海や陸に歴大な利権と権益を必要とする。縮む米国・日本と昇龍の中国との経済・政治の競争は激しくなる。

さきの総選挙で安倍自民党が圧勝した。安倍は五年の間に三回も総選挙をやった。野党の支持基盤の薄いことを狙っての先制攻撃である。世界でもっとも「平和」な国、日本にも二〇二〇年を前後して、激動の季節が訪れる可能性がみれる。

選挙結果への視点

総選挙の結果についてはメディア、政党諸党派の評論、分析があふれている。これから日本政治はどうなるか、問題意識を述べる。

政治では四つの特徴を考えたい。

第一は、自民党支持基盤が融けていることだ。議席は定数四六五に二八一、議席率は六〇・四％にもなる。獲得比例票は一八五万票の三三・一％にすぎず、投票率に自民獲得率をかけた絶対得票率は一七・九％にすぎぬ。これは、日本労働組合組織率とほぼ同じである。労組組織率が高まれば自民党の支持率はかならず下がる。

第二は自民党の小判鮫、公明党の敗北である。議席は三四から二九、比例得票率は一三・七一％から一二・五一％となった。公明は好戦性を強める政府方針を支え続けた。これに公明の支持基盤である創価学会員が不安と不満を表明した。これからの「民意」をみるうえで興味深い現れである。

第三は、希望党首の「選別・排除」で民進党が四つに分裂、立憲民主党が生まれ、躍進したことだ。立憲民主は北朝鮮との平和解決、安保関連法を前提とした憲法九条改悪反対を公約した。「戦争」反対への期待が押し上げた。共産、公明、社民が比例票を大きく減らしたことも示される。立憲民主党は地方組織、地方議員はなく、支持基盤はうすい。公約の具体化そして組織政策が課題となる。

第四は、小選挙区制下のたたかいかい方である。当選者は一人であるから、政権党に対抗するには共同・共闘が必要となる。そこで問われるのは歴史の発展を正しく進める共闘のあり方、反自民の野党の足腰強化である。情勢はあとでみるように、大きく変化することが予想されるから、「足腰強化」、とりわけ地方議員拡大は最重要課題となる。

労働戦線と政党支持

次に連合を中心とする労働戦線の動向についてである。

すでに述べたが、小池氏の『選別・排除』が民進党を四つに分裂させた。連合は民進候補を推薦した。この結果、連合の支持政党は四つに分裂した。連合推せん候補の当選者は九九人。政党別内訳は希望三九、立憲三八、社民二、無所属二〇、他に参院の民進がある。希望と立憲は世界観を異にする。無所属、参院民進議員の世界観も同様である。

立憲は「民主・リベラル」を世界観とする。「民主・リベラル」を世界観とする連合傘下組合は少なくない。たとえば、自治労、日教組、私鉄総連だ。これら労働組合には「好ましい」事態の到来だ。十月初旬の連合大会で私鉄総連は「今回の民進党前代表の動きについては、全国の私鉄組合員から強い怒りの声、全国代表者会議でもきわめて厳しい発言がでた。運動と政治の方向を間違えるな」。自治労は「今次総選挙の目標は、安倍一強政治を終わらせること。連合内の分裂をはかろうとする動きに惑わされることなく、団結と統一的な対応を貫くことが重要」と発言した。これら組合に歴史を前に進める運動を期待するのは私だけではあるまい。

次に考えなくてはならぬのは、連合の政党支持がどうなるかだ。連合の政治方針は

反共産・非自民、政策中心に政権交代可能な政治をつくるであり、連合の政策を支持する政党、政治家の連携である。上記のように民進党は四分解した。「一党支持」は決められない。これからどうなるか。連合会長は一七年十一月の記者会見で①今の時点で希望、立憲、民進に差をつけない、②産別ごとに組織内候補やその候補が所属する政党を個別支持、③三党の結集を期待すると述べた。立憲と希望の世界観は水と油ほど違う。三党結集は今のところない。

連合は政策中心に「政党と政治家を支持する」ことを政治方針とする。考えられるのは、連合の政策を支持する議員の集まりをつくることではないか。連合は「一八年新年交歓会」(「旗開き」とはいわない)に共産を除くすべての政党を招待する。

(伊勢 太郎)

ゲバラ没50年、『資本論』刊行150年に訴える

―マルクス経済学を学びなおし、科学的社会主義を守り発展させよう―

理論戦線での心配

2017年も末である。「降ってわいた」10月のモリカケ解散総選挙から少しは心も体も落ち着いたのであろうか。改憲三分の二議席という衆参の国会議席情勢は残念ながら変化はない。

しかし、私は実践的にはジリ貧この上なくとも、科学的社会主義の戦線について運動上は少しも心配していない。労組の形式的機関運営主義をくすぐられて単産・ローカルセンターの上部が腐敗して(ナショナルセンターや党本部は最初から論外)、総評解体・連合への吸収、日本社会党は小選挙区比例代表並立制でまんまと日本独占資本の中曽根康弘(元首相)路線を貫徹されてしまっただけである。法則にそって頑張れば、必ずや日本の労働者運動はよみがえると確信する(ある先輩は、世界社会主義運動は「キューバ共産党と日本に新社会党が健在であれば大丈夫」とまで喝破されたそうだ)。それよりも、科学的社会主義の理論戦線で中枢が大きく揺らいでしまっていることを、ゲバラ没50年、『資本論』第一巻刊行150年の2017年にあたり、大きく懸念する。

前者(実践的)の問題は敵の攻撃にいろんな理由でおしくも、あるいはさもありませんという訳で負けてしまったということであり、後者(理論的)は目ぼしい攻撃もなく自滅するということから(救いようがない)。

私は3年前、本誌に「向坂先生、原野人さん、『社会通信』と題して、滋賀で生涯何度目かのマルクス『資本論』学習会を細々と始めてから四年目となり(従って今年で七年目)、月一回で今回は41回目を数える。「人生最後の『資本論』学習会だ」と張り切っていた仲間もいたが、遅々として進まない。今、向坂逸郎訳岩波文庫版でようやく2冊目にはいり、第一巻「資本の生産過程」第三篇「絶対的剰余価値の生産」第八章「労働日」の第六節「標準労働日のための闘争。労働時間の強制法による制限。1833―1864年のイギリスの工場立法」を学習している。レポートのAさんは、「第六節はマルクスが最も力を入れて書いた部分であろう。労働者階級に向かっ

て、自分たちの階級がおかれた立場を自覚させるといふ観点からして、『資本論』のなかでも、最も読みやすく理解しやすいように記述されている」と。イギリスのこの頃のチャーティスト運動については、さすがにインターネット検索でも詳細があまり出てこず、県立図書館等にこの夏通って究明し次回レポートするとのこと。「このチャーティスト運動はとにかく徹底研究に値する」と学習会の様子を紹介させていた（『社会通信』1175号 2014年9月1日）。このチャーティスト運動のところは半年以上やった。

そこで私は、一緒に学習会をやっているAさんについて、原野人さんや小林晃先生、滝野忠さんをはじめとする執筆者の『社会通信』は、「いろんな具体的な問題を『資本論』や価値論などと絡めて展開しているが、すばらしい。向坂逸郎さんや労農派はすごい。『資本論』学習会をしてきて本当に良かった」と、『社会通信』を新規購読されたことを紹介した（今はご承知のごとく、ご奇特にも本誌は年中無料大公開だが）。

『資本論』で展開する人口法則

その上で、残念ながら「民間ブルジョア研究機関や日本の資本主義政府が人口論を科学的に把握できないのは当然としても、それと并列に「人口急減」の「危機感を共有」（『科学的社会主義』2014年8月号、野崎佳伸、66頁）してしまい、はては中国との軍事力の差まで心配してしまうわが目を疑う論文（『人口急減Ⅱ極点社会到来』を検証する）は3年前のものだが、病膏肓に至りひどくこそなれ論点の改善は何らなされていず、問題点の原型批判としてまな板に載せる。

この野崎さんは宇野理論というとても難解な、マルクス『資本論』を「近代化」した（向坂『マルクス経済学と私』158頁）理論を信奉しておられるとのことだが、マルクスそのものは果たして読まれたのであろうか。野崎さんはさかんにブルジョア研究機関と一緒に人口減少を心配し、ブルジョア政府Ⅱ安倍政権のその心配の仕方が不十分だと心配されている。しかし、人口減が貧困化を招くとも限らないし、逆に豊かになるとも限らない。資本主義の人口法則、すなわち相対的過剰人口の法則などもう少し、学んだらどうだろうか。現象をそのまま捉える、ブルジョア経済学の水準である。いやそれ以下でさえある。貧しかったかつての（今も？）中国やインドは人口が膨大だったし、西欧は人口が抑え気味でも決して貧困国でもなかった（トータルでは）、野崎さん最原の「日本創世会議」も否定しないだろう。拙宅などは男子四人もあり、ワーキングプアこの上ない。・・・有機的組成の高度化を機軸として、「資本制生産方法の発展は、不断に、失業者を、所謂『過剰人口』を作り出して行く。・・・『現実的人口増加の制限から独立』して、資本制生産方法の機構そのものから『必然的』に産出されるところのもの」（向坂『経済学研究』生活社、47年、229〜230頁）ということ。（『社会通信』同上）であるが、他ならぬ向坂逸郎の理論と思想に立脚して発展させているであろう機関誌で、堂々と展開されていることに大きな懸念を感じざるを得ない。

その後の野崎氏の他のところでまた述べられる「人口論」もいくつか目を通し、また「原本」でもある「14万部突破！ 衝撃の『増田レポート』のすべて。896の市

町村が消える前に何をすべきか」という増田寛也編著『地方消滅・・・東京一極集中が招く人口急減』（中公新書14年8月25日）も読み、他の立場からの批判書（岡田知弘著『自治体消滅』論を超えて』自治体研究社、14年12月15日）などとも読したが、3年前の私見から根本的には何の変化もない。あえて長文の引用をしたゆえんである。

「主体的な実践」の招くもの

Kさんはこの『社会通信』1184号（15年1月15日）で宇野理論を評価して、「資本主義の経済法則に縛りつけられた労働者に、主体的な実践による社会主義への道を教えた」と書かれているが、なぜ野崎氏のような優秀な方が隘路に陥るかというところ、野崎さんが見解発表の場とされているその同じ機関誌でその先輩が評価されている三段階論に原因がある。

「原理論―段階論―現状分析」というのが「宇野三段階論」で、資本論は結論・核心である。「資本主義的蓄積の一般法則」と「資本主義的蓄積の歴史的傾向」がこともあろうにそぎ落とされた「原理論」からも、さらにツークッション置かれて位置づけされる「現状分析」がフリーハンド状態となる。

だからフリーハンドとなって「左」して極左暴力集団の革マル派に採用されたり、他の「新左翼」理論とも一部なったり、はたまた名にしおう宇野派学者の大内秀明氏らの日本社会党「理論センター」で80年代「党宣言」策定にいたり、それまで左派が理論的・思想的に依拠してきた『日本における社会主義への道』廃棄へと、日本社会党の理論的解体へと「結実」してしまったのだ。

今日、近代経済学的に人口論やたまた中国社会主義論（これなどは向坂氏がとうに戦前に論破しつくした日本共産党系の講座派的水準でさえある）などを扱い、「原理論」は堅持しているという論客がいてもむべなるかなであるのは、宇野三段階論に起因するのである。

『資本論』や価値論と絡めて現実を分析」しないのが宇野理論なのだから。

「科学とイデオロギーの峻別」、理論と実践の分離

宇野理論がどうこう言っていると「引いて」しまう読者・活動家が多いだろうと書きながら懸念するが、私に原因はないのでご容赦いただくしかない。そして、こういう『資本論』の「近代化」や「現代化」、科学的社会主義理論・思想の一見、見栄えのよい仕立ては昔から何ぼでもある。『21世紀の資本（論）』や半世紀前からの宇野理論ばかりではない。

向坂先生は六十年三池闘争を三池労働者と一緒に歩みながら、そして新幹線もLCCもない時代に東京と九州・大牟田と信州松本（研究の場）を行き来しながら（他に全国での研究会・学習会・講演会、党会議もこなしながら。もちろん携帯電話もメールもパソコンもなく）、新潮社からマルクス・エンゲルス選集を出版された。単に二人の翻訳本だけでなく、経済学者としては世界初の大著『マルクス伝』も刊行されたし、日本の学者・論客を動員して『マルクスの批判と反批判』も世に問うている。

宇野理論の『資本論』の「原理論への純化」と三段階論とならんだ三つ目のキーワードは「科学とイデオロギーの峻別」ないしは「理論と実践の分離」である。

本当に優秀で献身的な研究者・岡崎三郎氏はこの新潮社版の「第二章唯物史観・第一節社会科学の方法論」を担当して、フランス最大の経済史家であったアンリ・セ（1864—1936）を取り上げ、「（アンリ・セは）科学は何物にもとられない見地に立ってのみ科学となり得るのであり、特定の政治的あるいは社会的意図に結び付けられては科学はあり得ないと強調する。しかし史的唯物論は決して特定の政治的あるいは社会的意図に科学を従属させようとするものではない。むしろ逆に厳密に科学的な、現存の社会体制の維持とか伝統的な理論とかに全くとらわれない立場に立って、社会の発展の方向を洞察し、それにもとづいて社会の発展を促進する手段を見出そうとするものである。そしてこれによって社会科学は真に科学の名に値する科学となるのである」（58頁、58年3月20日）と述べる。

私はこれに付け加える何の言葉も持ち合わせない。

Kさんは向坂先生の『わが資本論』を「宇野先生を意識しての記述を改めて感じる」とのことだが、この選集16巻でもそうであった。そして、アンリ・セやエンゲルスがいよいよながら相手にした（盲目でのハンデがあったため）『反デュリング論』の相手のほうがはるかに「大物」だったのである。

石河康国氏著『労農派マルクス主義 下巻』（社会評論社、235頁、08年7月10日）で詳述されているが、それまでこのようなヨーロッパの学者などをあえて相手にたてて「イソップの言葉」で展開してきた宇野理論批判を、向坂氏は67年6月4日の『資本論』百年記念中央集会の九段会館1700人の前で、宇野氏の『資本論』からは社会主義の必然は論証されない」との自説展開を聞き、ついに「宇野君は変わった」と批判したので公然批判の端緒となった（その場に居合わせなかった宇野氏にご注進した宇野門下生のおかげで）。それから折にふれ宇野理論批判を小出しにされていた向坂氏だが、私には「宇野理論批判の6巻本を出したい」と74年正月に言われていた。私の大学卒論のネタにしたいので早く出してほしいとねだったが、先生は他の階級闘争の重要課題に追われて時間的になかなか、今日の理論戦線の動揺を招いたことは残念至極である（私もそれで大学中退し、本年末で総評地方オルグ43年である。総評オルグの最長不倒距離を歩んだ。しかし、それもあと2か月で終了であるが）。

向坂先生は喜んでくれるか

3年前に私が提起したことは無視抹殺され、ひどい「現状分析」が垂れ流され続けてきた。そのひどい現状分析を「踏まえた」方針が、BI（ベーシック・インカム）であった。また最高責任者が「賃金は労働の価格である」とまでその「巻頭言」で展開する始末である。「本質（労働力の価格）と現象（労働の価格）との弁証法的統一」などということは、宇野弘藏でさえ言わなかった。

3年間の時間の空費というよりは、ひどさの深刻化ということなのであろう。理論的混乱の悪魔のサイクルの結論ともいえよう。

本年は世界帝国主義の総攻撃にもかかわらず、社会主義国として発展するキューバ

の人民が限りなく敬愛するゲバラの没50年であり、マルクス『資本論』第一巻発刊150年であった。ちょうど半世紀前の東京での記念講演会で、向坂逸郎氏が批判した宇野弘藏氏の学派の現存する第一人者とかいう学者を、東京でも大阪でも招いて、刊行150年記念講演会をやった報告文のちょうど右ページに、ある月刊誌で石河さんは自著『向坂逸郎評伝―『資本論』の探求と変革の意志』の自薦分を書いておられる。悪いが、ブラックユーモアとしか私には受け取れなかった。

(2017年11月16日 稲村 守)

マルクスの志、その追求の軌跡を追う(五)

スメタナの連作交響詩『わが祖国』

―「原始キリスト教の歴史について」②―

☆☆☆ちよつと寄り道 ③

「原始キリスト教の歴史について」とスメタナの連作交響詩『わが祖国』

エンゲルスは「原始キリスト教の歴史について」の中で、「タボール党」のことを紹介し、「フスの火刑後、その支持者によって結成されたフス党の一派」と註が付けられています(『マル・エン選集』第12巻 新潮社162頁)。タボールといえば、思い出す名曲中の名曲があります。それは、スメタナの連作交響詩『わが祖国』全曲の中の一曲「タボール」です。

ボヘミアの作曲家と言いますと、スメタナ、ドボルザーク、ヤナーチェックが有名です。幸いなことに、私は松本市音楽文化ホールで仕事をしていた関係で、もう一人重要なボヘミアの作曲家として、マルティヌーを知ることができました。マルティヌーの、知られざる名曲であるチェロ協奏曲第2番の、日本初演を企てましたが、残念ながら実現できませんでした。この曲の日本初演は、井上道義さんの指揮、管弦楽はオーケストラ・アンサンブル金沢、ソリストはこのオケの首席奏者で、世界初演のチェリストであったヴェチトモフの愛弟子であるルドヴィード・カントさんのチェロで、2011年6月26日に石川県立音楽堂で行われました。この歴史的演奏会には、松本市音楽文化ホールからバス一台を仕立て、45人で聴きに行くことができました。松本市音楽文化ホールでは、初演とはゆかず二回目でしたが、日本初演者でもあるルドヴィード・カントさんのチェロ、スワロフスキーの指揮で、かつてカントさんがソロ・チェリストを務めていたスロヴァキア・フィルハーモニー管弦楽団の演奏会として、2015年7月4日に実現できました。

この松本市音楽文化ホールでの演奏会では、スメタナの連作交響詩『わが祖国』より、有名な「モルダウ」も演目に入れてもらいました。中学校三年の音楽の授業で、「交響詩」とは何かの説明があり、その代表曲として「わが祖国」の第2曲「モルダウ」をLPレコードで聴かせてくれた五味孝司先生を念頭に、企画をしました。

※〔註〕世には不思議な出会いと再会があるものです。音文ホールへ異動一年目に、仕事として友の会のバス・ツアーで横浜のみなどみらいホールへ、スメタナの連作交響詩『わが祖国』全曲演奏会を聴きに行く、バス・ツアーを企画し、引率することに

なりました。アシケナージ指揮のチェコ・フィルハーモニー管弦楽団の演奏でした。文字通り、スメタナのこの名曲を十八番としているオーケストラの、素晴らしい演奏会でした。

このバス・ツアーの参加者の一人であった五味先生は、ツアーの一ヶ月程前に私を訪ねて来ました。「バスの中で、君が二時間位講座をしてはどうか。スメタナの伝記本と、『わが祖国』に関する資料を置いて行くからしっかりと勉強して、スメタナと言う作曲家とこの連作交響詩について、わかり易い解説をしなさい！」と言うのでした。先生の貸してくれたスメタナの伝記二冊には、赤と青のラインが引かれているだけでなく、欄外には膨大な書き込みがあり、驚くと共に圧倒されました。音楽が、思想でもあり闘いの武器でもあることも、改めて考えさせられました。中学校の時、五味先生に習った音楽の教科書を探し出して見たら、テキストの欄外には、先生がこの中の「モルダウ」を例に、交響詩について説明をした内容が書き込まれていました。メモには、「交響詩Ⅱ情景等を詩的に表わす曲」とあります。

そんな訳でこの時、ボヘミアの歴史、スメタナのこと、チェコ・フィルの歴史等々をそれなりに学ぶ機会を得ました。

さて、6曲からなる連作交響詩『わが祖国』は、スメタナの祖国への想いが詰まった作品であります。

1946年以来、毎年5月12日から開催される「プラハの春」音楽祭のオーブニングは、チェコ・フィルによるスメタナの連作交響詩『わが祖国』全曲演奏会と決まっているのです。5月12日はスメタナの命日であります。スメタナは、ハプスブルク家支配下から独立しようとする民族運動に共鳴し、自身も24歳で義勇軍に参加しています。スメタナの作品には、ボヘミアの自然や伝説や歴史を題材とし、民族意識を高揚させるものが多いことが知られています。ちなみに、チェコ・フィルの歴史は1896年に遡り、その最初の演奏会は、ドボルザークの自作自演の演奏会だったそうです。

そして第二次世界大戦中、ドイツ軍の支配下にあったプラハですが、こうした状況下で、チェコ・フィルが『わが祖国』を演奏することは、まさに命懸けだったのです。手許に、名指揮者タリツヒがチェコ・フィルを指揮した『わが祖国』全曲のCDがあります。これは1939年6月5日のプラハでのライブ録音です。終演直後に、自然と聴衆の間から湧き起こるチェコ国歌が、このCDには収められています。なんとも感動的なライブ録音です。

連作交響詩『わが祖国』の第5曲は「タボール」、第6曲は「ブラニーク」というタイトルです。プラハ大学学長で哲学者であったヤン・フス(1371〜1415年)が中心となつての宗教改革運動は、ローマ法王によって弾圧され、フスは異端者として火刑に処せられたことは、高校の世界史の授業で勉強した通りです。フス教徒は、ボヘミアの南部の街である「タボール」を拠点として運動をします。前述のエンゲルスの「タボール党」は、我々が教科書で習った「フス党」ですが、「タボール」を敗走して「ブラニーク」に籠るのでした。

ローマ法王は、異端としたフスを処刑したのですが、1999年になって誤りを認め、謝罪しました。処刑から584年も経っていました。

『共産党宣言』本文の冒頭は、「今日までのあらゆる社会の歴史は、階級闘争の歴史である。」という有名な一文で始まります。

「活動家は、ごちゃごちゃ言っていないから、職場で闘っていれば良い！」とおっしゃった大指導者がいました。また、「あらゆる階級闘争は政治闘争である。」（『共産党宣言』岩波文庫55頁）を引き合いに出し、各種選挙闘争こそが階級闘争のように言う大指導者もいました。当時、こうした人達は向坂逸郎を信奉していましたが、ソ連・東欧の「社会主義」が崩壊した時には、「やっぱり、向坂のジイさんは間違っていたな！」とも、公言していました。

こうした人達は、階級闘争とは何か、その内容について、一面的にしか捉えていないのではないか、と思うのです。向坂先生は、有名な平和革命について論じた「歴史的法則について」の中で、「階級闘争には無数の形態がある。工場の湯飲み場を清潔にする要求から、賃金値上げのストライキ、一般的政治的大衆罷業、武装蜂起にいたるまである。哲学上の論争から革命的内乱にいたるまである。階級闘争は、絢爛たる絵画のなかにもあれば、ドラ声をはりあげる選挙演説のなかにもある」『私の社会主義』至誠堂、『わが生涯の闘い』文藝春秋、『日本革命と社会党』社会主義協会、等々所収）と言われます。

このように、階級闘争は「絢爛たる絵画のなかにも」あり、壮大な音楽の中にもありますし、演劇の中にもあります。仕事柄、音楽や演劇と言った、再現芸術家として余りにも有名な大芸術家と言われる方々とも接して来ました。接し、話を聞いたりする中で、こうした人達の中には音楽や演劇の中に、それらが書かれた時代的背景、作者の意図や気持ちといったものとの関係なく演じていると思えてならぬ大家も、多く見受けられるのです。演ずる側にも、聞いたり見たりする側にも、「芸術のための芸術」といった「芸術至上主義」を感じてしまうのです。

※〔註〕資本主義社会で芸術至上主義が何故に生まれるのか、向坂先生は『マルクス伝』の第十三章『資本論』で、これに言及されています。是非読んで欲しく思います。

ベートーヴェンや、前述のスメタナや、あるいはブレヒトといった人たちが、こうした現代の演者と接するならば、どのように感じ、どのように考えるのだろうかと思うわけです。ロマン・ロランは、『ベートーヴェンの生涯』の中で、ベートーヴェンの言葉を引用しています。それは、「僕の芸術は貧しい人々に最もよく役立たねばならぬ。」（岩波文庫27頁）、というものです。ブレヒトの、「君たちは何のために研究するんだ？ 私は科学の唯一の目的は、人間の生存条件の辛さを軽くすることにありと思うんだ。」（『ガリレオ・ガリレイ』岩波文庫192頁）を、思い浮かべます。

☆☆☆ ちょっと寄り道 ③おしまい☆☆☆

二〇一七年九月十四日早朝 『資本論』第一巻刊行百五十年の日に

（中澤 秀行・つづく）

◇読者からのおたより◇

具体的分析が肝要 具体的分析が肝要でしょうね！独占資本の利潤（資本）蓄積の具体的分析と労働者管理・支配システムも具体的（資本と賃労働の視点）で分析することが肝要かと思えます。「働き方改革」も独占資本は利潤の増加と労働者の分断管理で動いていますよ！（大阪・K）
揺るぎない理論 通信No.1227号で郵送が終わってから、ご無沙汰しておりますが、名寄に戻ってこられた（以前は札幌在住）OさんからNo.1228号分から各号をその都度、インターネット受信をコピーしてくれて、以降1号も欠かさず拝見しています。感謝です。

お陰様で、長年、身に染みた社会通信感覚も、何とか持続させてもらっています。併せて「週刊新社会」の新聞は、以前から切らず購読していますので、この度のベーシックインカムについては、不審に思っていました。「ご意見」をいただいてから、早く同感の返信を書こうと思いましたが、「BI」に関する社会通信のNo.1237の原野人さんの「時空を自在に乗り越える観念」の文章から①⑤まで、同誌紙を全号出して読ませてもらいました。

新社会党の「中期政策」補強案は、ベーシックインカムのカタカナ語で、どこから取り入れたのか。カタカナ語辞典で調べて見ましたが、「ベーシック」と「インカム」は繋がっていません。「ベーシック」は、パソコン用語として使われているらしい。「インカム」は（所得、収入）と辞典に。

滝野さん、原野人さん、さらに松本市の中澤秀行さんも、詳細に解説されていますが、私も若い頃（現在は八〇代）に不まじめな勉強でしたけど向坂逸郎先生の『資本論をめぐる』や『同志に与う』（共に労大出版）、さらに「理論と実践」（国労反合研）も最近読んでみたりしていますが、私の頭の中には、科学的社会主義しか入っていませんので、賃金も、年金も、社会保障も、生活費として一括支給（一〇万円/月？）等、資本主義社会では考えられない発想だと思います。本当にそれが有り得ると考えるなら「寄らば大樹の陰」で、現在の安倍政権に幻想を抱いているとしか考えられません。巨大資本のあくなき利潤の追求は歴史を見れば判ります。

マルクスの資本論「資本主義的蓄積の一般的法則」が揺るぎない理論だと思います。いつの時代も資本家は国民大衆から搾取と収奪で支配し、自公政権は、それを手伝って政治をしている。そう考えるのが正しいと信じています。（北海道名寄市・斎藤二郎）

新社会党とBI 新社会党はどこへ行くのでしょうか。ベーシックインカム（BI）は、右翼の大坂の橋下、東京の小池が提案しています。推進している学者も新自由主義者です。

反対論、批判的論文は、本誌をふくめ、全国各地の心ある人たちが次々と出されていますが、積極的賛成論は聞かれません。本部の清水政策担当中執の説明は、全くことの本質を理解できていないので混乱をもたらすだけで問題外。長南書記長は説明する先々で内容が異なり信用できません。

批判論を宮城の佐々木一雄さんが発表しているように、賛成論者も堂々と意見表明、論文を発表してほしいです。このままズルズルと大会で決定することは新社会党の自殺行為です。（川井吉郎）

新社会党と介護保険 『通信』No.1253号、原野人さん推薦「改憲を迎え撃つ」必読書、矢田部理著『いつも全力。こんな議員が国会にいた』を読み、私は介護の取り組みで、気持を新たに。

「九七年の介護保険の導入は、『介護の社会化』として鳴り物入りで宣伝され、マスコミも野党も労組もなだれをうって賛成にまわった。しかし、介護の施設も介護職員の数も待遇も圧倒的に不足し、劣悪な状態に手をつけずに保険制度に移行すれば、その矛盾は介護を受ける人と介護職員にしわ寄せされる、税金が保険料に名を変えただけで、保険料は次々に引き上げられ、庶民の負担が増える仕組みにすぎないと批判し、反対票を投じた。それから二〇年：：（256頁）」と。

九七年の介護保険導入は「措置」から「契約」へ。被保険者と事業者との自由契約となった。医療サービスは「現物給付」規定で、貧乏人と金持ちとに医療内容の格差が生じぬよう「混合診療原則禁止」。介護サービス41条は「現金給付」の書きぶりで「混合介護」を導く、東京・豊島区は来春から「新たな混合介護」をスタートさせる。新社会党中期政策補強案（17年8月）14頁では介護サービスも「現物給付」と解説しているが、経過と実態、運動の方向を丁寧に示し取り組んで欲しい。（宮本嘉峰）

読者の便り 講演会ご苦勞様でした。当日は、身内が95歳で亡くなり、その通夜と重なり欠席となりました。毎回、滝野さんの情勢報告を聞くのを楽しみにしていたのに残念です。特に、今回は、市民連合の動きを封じ込めるような希望・民主党の混乱を初手に、新生野党の分析や公明党が議席を落とす等もありましたので、この情勢をどのように理解していくのか、楽しみにしていました。

社会通信・読者の便りへの掲載有難うございました。「見たよ・・・」と言って久しぶりの方からの連絡もありました。ネット公開になってから読者の便りが少なくなったのが残念ですね。僭越ですが、もつと多くの方からのお便りがあればいいなと感じています。寒くなります・・・ご自愛のほど・・・ (山梨・上原和夫)

人手不足が元凶 私たちにとって最も重要な法案が、今年の国会で審議されます。それは、同一労働同一賃金を実現するための労働者派遣法、パートタイム労働法、労働契約法の3法の改正と、長時間労働は正に向けた残業上限規制を強化する労働基準法の改正が柱となる「働き方改革関連法案」です。この労基法改正案には高収入の一部専門職を労働時間規制から外して成果型賃金にする「高度プロフェッショナル制度」が盛り込まれており、野党側は「残業代ゼロ法案」「過労死促進」と反対姿勢を崩していません。

これらの法案は、同一労働同一賃金、最低賃金の底上げなど、非正規労働者の処遇改善に見せかけていますが、労働者の総額人件費を引き下げることが目的とした財界重視の法案となっています。事実、雇用人5441万人のうち、正規の職員・従業員は、前年同期に比べ44万人増加し3422万人。非正規の職員・従業員は21万人増加し2018万人。このように非正規労働者が2000万人を超す中、非正規の7割が年収200万円に届かないことが、連合などのアンケートで明らかになっています。

一方で、企業の利益剰余金(内部留保)は前年度よりも約28兆円多い406兆2348億円と、過去最高を更新しています。(財務省9月1日発表、2016年度の法人企業統計)

また、政府は、国と地方あわせて約330万人に上る公務員の定年について、現在の60歳から65歳に2019年度から段階的に延長する方向です。これは年金支給年齢の引き上げに対応する狙いがあります。このような国民の福祉を切り捨て、財界主導の政策をこれ以上許してはなりません。

私たち労働者が人間らしく安心して働き続け生き続けるためには、また、安倍政権の狙う「戦争をする国づくり」を阻止し、平和な日本の将来を築くためには、労働組合運動の強化が緊急課題となっています。

一人ひとりの労働者が労働者のものの見方考え方を身に着けて、労働組合で団結して要求を勝ち取り、賃金をはじめとして労働条件の改善をすることで、労働組合がなくてはならないものという意識を広げていく必要があります。そのためには、私たち労働者は学習を継続していかなければなりません。

自治体職場や教育現場では、事務量の増加に追いつかない人手不足などにより、労働者に負担がのしかかってきています。過労死ラインを超過している教員の勤務実態が連日報道されています。

昨年の講座後のアンケートには、「年休が取れない」「土日イベントの代休が取れない」「賃金が安い」「家へ帰ってから仕事のことか気がかかる」「保護者との対応でくたくただ」「精神的な疲れから休む人が増えている」などの声が寄せられています。(労働大学映東講座実行委員会)

三池・水俣・福島、沖繩を闘い継ぐ 戦後、日本資本主義体制が確立していく中で、国策としての石炭合理化政策、石油コンビナート化の促進による環境汚染、原子力基本法の制定、沖繩の基地化は国家権力と総資本が一体となって強行した体制的合理化であり、その結果、労働者や勤労市民の生命が奪われ、傷つき、正当な権利が踏みにじられました。

「三池COと共闘の会」は三池大災害をはじめ、この四つの課題は単に三井の、チッソの、東電の事だけでなく資本主義社会体制の大きな矛盾であり、恥部であると捉え、主権者である労働者が平和を守り、人間らしく働き続け、文化的な生活を営むことが実現できる社会体制を求め闘い続けています。

『三池CO』2017年11月1日No.167(抜粋)

12・3 大飯原発うごかすな！ 現地全国集会開催 怒りにあふれ超満席、町内デモも 12月3日、福井県おおい町で、「大飯原発うごかすな！ 現地全国集会」が開かれた。「原子力発電に反対する福井県民会議」と「ふるさとを守る高浜・おおいの会」、そして「若狭の原発を考える会」が呼びかけて、「大飯原発うごかすな！ 実行委員会」が主催した。

神戸製鋼の材料データ改ざん問題で関電自ら来年1・3月予定の大飯原発3・4号機再稼働を延期せざるを得なくなり、1450万人の近畿の水源・びわ湖を預かる滋賀県知事と県都・大津市長は再度反対を表明する中、安倍政権の世耕弘成経済産業省と面談した福井県・西川一誠知事が同意表明をして、強引に「地元合意」を取り付けたことに福井県内外、関西・福島はじめ原発立地全国から会場超満席の5000人が参加した。

主催者挨拶に立った若狭の原発を考える会の木原壮林代表は「関電や政府の心胆寒からしめる大衆運動をおこし、民意無視を後悔させよう」と訴え。北海道、青森、志賀、東京、浜岡、四国、川内から闘う決意が表明され、柏崎刈羽、東海第二、伊方、高知から文書メッセージが寄せられ、福島県大熊町・木幡ますみ町議からの訴え、「福井から原発を止める裁判の会」の島田広弁護団長は大飯原発運転差し止め控訴審の状況の説明も。

続いて地元・若狭湾沿岸、京都北部の住民の皆さん8市町8人の挨拶があり、「ふるさとを守る高浜・おおいの会」の宮崎宗真さんは「福島原発事故の教訓はどこへ行ってしまったのか。電力は足りている」と訴え。関西各地からは「さいなら原発・びわこネットワーク」の木戸恵子さんから「若狭の原発を考える会」で泊二日・月二回100回以上重ねられている「反原発アミーバデモ」で滋賀県高島市でつかんだ「暑いのにご苦勞さん。スイカ食べて行き」とか、泥だらけの手で「もらうわ」と畑仕事やめてチラシを受け取ってくれたり、「戦争と原発はあかん。今の平和がいい」と言われたりした反原発の声、多数の実態が文書で報告された。

京都、兵庫の市民団体に続いて、三歳と五歳の子どもさんを連れて参加した「反原発自治体議員・市民連盟関西ブロック」の大阪・高槻市・高木りゅうた市議からは、自治体申し入れ行動などの報告、子どもが保育園で「戦争反対、原発反対」と声を出していることなどユニークに話された。

2労組（連帯労組関西地区生コン支部、ユニオンネットワーク・京都）からの連帯挨拶、原水禁国民会議・藤本事務局長からの文書メッセージの紹介を受け、「大飯原発再稼働の策動を糾弾し、原発全廃を求める！」集会決議を採択し、おおい町内のデモ行進に入った。わざわざ家から出てきて激励する住民のご家族や、お礼の挨拶をされる方等、原発立地町内でも民意の流れは変わりつつある潮目の変化を感じさせた集会・デモとなった。（※左記ブログではたくさんの写真入りで報告）
<http://blog.goo.ne.jp/takahamakarakanden>（「さいなら原発・びわこネットワーク」稲村守）

「辺野古・高江の現場から」113（毛利孝雄）呼びかけ集会にご参加を！

*2018・1・4 月例防衛省抗議・要請行動

- ・日時 1月4日（木）18時～19時 ・場所 防衛省正門前（市ヶ谷）
- ・呼びかけ 辺野古への基地建設を許さない実行委員会
- *2018・1・7 戦争止めよう！ 安倍9条改憲NO！ 2018新春の集い
- ・日時 1月7日（日）14時～16時30分 ・場所 北トピア・さくらホール（王子）
- ・お話し 「いやな空気は読みたくない」松尾貴史さん
- ・講演 「安倍9条改憲の危険性」石川健治さん ・入場無料・カンパあり
- ・呼びかけ 安倍9条改憲NO！ 全国市民アクション／総がかり行動実行委員会

*1・12 「標的の島風かたか」上映会&山城博治さん講演会

- ・日時 1月12日（金）午後の部15時～上映 17時～講演
- 夜の部 18時30分～上映 20時30分～講演

- ・場所 北トピア・つつじホール（王子）
- ・前売券 1000円 当日券 1200円 18歳未満無料
- ・主催 沖縄と北部を結ぶ集い実行委員会／総がかり行動北区実行委員会